

# Study on Method and Curriculum of Teaching in Panel-theater #2 : Case-study of the Workshop in India 2014-15

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-03 キーワード (Ja): キーワード (En): Panel-theater, teacher education, subject-matter developing, case-study 作成者: 矢野, 博之, 田中, 正代 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6353">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6353</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# パネルシアターの実践指導法研究 (2)

## ― 2014~15 インドでの指導ワークショップを事例として ―

矢野博之<sup>1)</sup>・田中正代<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>大妻女子大学家政学部児童学科, <sup>2)</sup>大妻女子大学家政学部児童学科非常勤講師

### Study on Method and Curriculum of Teaching in Panel-theater #2 ― Case-study of the Workshop in India 2014-15 ―

Hiroshi Yano and Masayo Tanaka

Key Words: パネルシアター (Panel-theater), 教員養成/教員研修 (teacher education), 教材開発 (subject-matter developing), 事例研究 (case-study)

#### 要旨

幼児教育実践や小学校での教科指導、特別支援教育での教材として注目かつ活用されるパネルシアターであるが、その制作・演示の技法の習得ならびに指導については、教授論的な研究開発はまだ着手されただけである。本研究は、パネルシアターについて 2013 年にモーリシャスで行った実験的ワークショップに引き続き、2014・2015 年とインドで行ったワークショップの実践記録に基づいている。社会経済的にも、また、学校文化や教授論的にも文化的背景の異なる参加者を対象としたワークショップの開発・実践を通して、パネルシアターを用いた学習を可能とする教師を養成するための要件と課題を抽出し検討する一連の探索的研究である。今回の実践からは、実践を想定することをワークショップの行程に組み込むことの重要性和そのための手がかりを確認した。

#### 1 主題の設定

本研究は、パネルシアターを学校教育における授業や学習などの諸活動に導入していくにあたり、授業者のパネルシアター制作・演示の一連の活動のありようの解明ないしは検討と、その習得や習熟を主題とする。1970 年代に古宇田亮順によって開発されたパネルシアターを、学校教育のなかの教科活動や特別活動に活用していくうえで、授業者には何が要件として求められるのか、あるいは、それをどのように配慮しながら行程として身につけていくのか/ブラッシュ・アップしていくのか、その実践能力

の育成に向けての方法論やカリキュラム論を問うことを目的とする。

本稿は、矢野・田中による「パネルシアターの実践指導法研究 (1)」(矢野・田中 2013) の課題を引き継ぎ、2014 年 8 月、2015 年 8 月の 2 回にわたり、インド共和国の教育関係機関の招聘で行ったパネルシアターの紹介と実践に向けてのワークショップの実践事例を手がかりとして、パネルシアターを活用できる授業者育成のためのカリキュラム開発と試行について、上記のテーマに迫る。(ここまで矢野担当。以下同様に分担を記す)

#### 2 研究の方法

先の論文では、次の二点を探索的な実践研究の成果として整理した。すなわち、① 授業を想定した気づきの発見、② パネルシアターの指導法として得た知見、の二点である。

① については、パネルシアターの特性である視覚効果の側面を肯定的にとらえ、授業者の動機づけに関係すること、また学習者の思考に訴える効果があることを再確認した。さらに、授業者は、パネルシアター制作作業の工程において、パネルシアターの演示を自分が教えるときにどのように使うかのイメージをもって活用を考えながら学ぶことが肝要であった点、また、既存の自己の授業を振り返りどう改善していくのかについて考える機会にもなった点が重要だと指摘した。② については、学習活動への導入を目的とするならば、授業へどう使うかを明らかにしていく演示が肝要になることを指摘した。

一方、課題として四点示した。① パネルシアターは絵自体が説明の要素や部分になるため、描画の技法の巧拙も影響する。ではそもそも描画が苦手な者への対応をどうするのか。② 教員の教材・教具選択の目をどのように養っていくのか(すべての教科に効果的とは言えないことによる)。③ 演じることが苦手な者をどのように取り組ませるのか。④ 制作時間をどのように確保するのか。

今回は、インドという異なる文化・国で、2014年・2015年の二年に渡り二度、同趣旨のワークショップの機会を得た。2014年7月ならびに2015年8月に、筆者の一人(田中)が、インド共和国(以下、インドと略す)で、パネルシアターに関するワークショップを行った。同国は、面積328万7,469平方km、日本の10倍近い広さで、人口は約12億1,057万人。人口増加率約17%と将来世界一の人口大国となりうる(2011年同国国勢調査より)。インド・アーリア族やドラビダ族、モンゴロイド族など他民族から成り、言語は連邦公用語としてヒンディー語が定められるが、他に憲法で公認されている言語だけで21種類と、多様な民族・言語で構成される国家である(外務省基礎データより。<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/india/data.html#section1>)。

このワークショップは、パネルシアターの作製・演示のための指導法の探索的な実践の試みとして実施した。インドという異なるフィールドで同様の実践を試行することを通して、その指導方法の模索と展開の過程を記録し、上記の知見と課題の確認を視点として、そこから見出せる指導方法論上の課題と要件を比較研究の枠組みに置きながら考察していく。(矢野)

### 3 事例研究1: インド共和国でのワークショップの実践記録(2014)

#### (1) インド・カルナールでのワークショップ(2014)の概要

2014年7月にインド・カルナールにてワークショップを開いた。契機は、2013年モーリシャスでのワークショップを参観したNIFAA(National Integrated Forum of Artists and Activists)の代表者が企画し、NIFAAとIIPA(Indian Institute of Public Administration)の共催で招聘された。担当者がモーリシャスのワークショップを見学したこともあり、カルナールの小学校に周知し、描画が苦手な教員を配慮して図画工作の教員も同伴するよう指示してい

た。参加者は、Secondary schoolの教員が3名、Senior secondary schoolが1名、Primary schoolが24名、Day care classが1名、その他2名の計31名。男女比は3:28と女性が多かったが、元来同地の小学校教員は女性が多いことに由来すると考えられる。経験年数は1年目から20年目までと多様であった。

#### (2) ワークショップの活動記録: 1日目(2014年7月7日)

① オープニング(10:00~10:10): 主催者挨拶、ゲスト紹介、ゲスト挨拶。

② ワークショップ開始(10:10~10:30): 一日の予定を説明後、「ワークシート1: Before Demonstration」に取り組む。

③ デモンストレーション(10:30~10:45): プログラム「1. あいさつパネル(各国のあいさつの仕方)」→「2. 七夕の歌(歌)」→「3. ねずみの嫁入り(お話)」→「4. 手を洗おう(衛生教育)」。

参加者全員が、パネルシアターを初見だったため、新規に「あいさつパネル」を作り興味をもたせた。「あいさつパネル」とは、3組の男女が順番に登場して挨拶するプロットである。絵人形は、裏表貼り合わせてあり、裏向きで登場する。1組目はインド人キャラクター。「Where are they from?」「India」「Namaste!」と挨拶をさせてから表向きにひっくり返す。同様に、2組目は欧米人。3組目は日本人キャラクターに「こんにちは」とお辞儀させる。この絵人形を使って、パネルシアターの原理(パネル板に貼る布、Pペーパーの素材を示し、付着する原理を説明した。また、当日が日本の七夕にあたったので『七夕』の歌に乗せてパネルを見せ、日本の文化についても紹介した。

また、1日目は日本文化を学ぶ内容で演示し、パネルシアターが“教えることに使える”ものである点を強調した。また、前日にインドのスラム街のこどもたちにパネルシアターを見せており、そこで演じた「手をあらおう」を演示し、その時のこどもたちの様子も話した。実際のこどもの反応を交えて紹介することにより、パネルシアターを使った授業を身近に感じ、やってみたいという気持ちをもたせることをねらった。

④ ワークシート1および、ワークシート2の前半を書いてもらう。(10:45~10:50)。

⑤ 作成(10:50~11:30)。

第一に、テーマの設定を促した。パネルシアターにしてみたいテーマについて話し合わせた。参考と

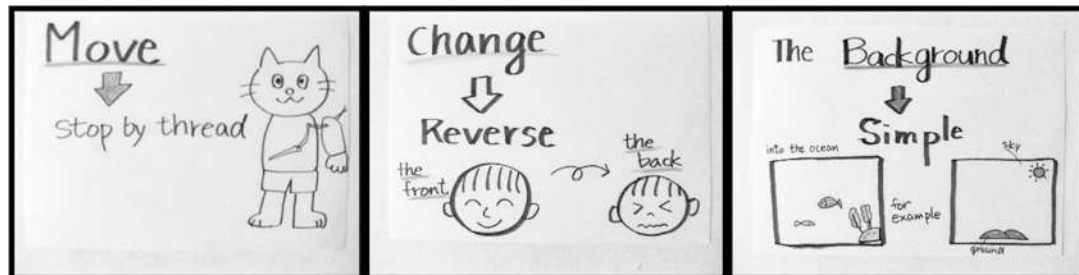


図1 パネルシアターの原理を示す3枚のシート

して、「歌 (Song)」「お話 (Folk tale)」「教材 (Use for subject)」の3つの視点を例示した。結果、6グループに分けて取り組んだうち、お話を選んだグループが5つ（なかでも教訓めいた道徳的な話が多かった）、歌が1つ（やはり教えるために使おうとしているようすである）となる一方、教科を特定して作るグループはなかった。テーマ決定後、どのようなキャラクター（＝絵人形）が必要かを話し合っただ。そこでの説明の要点は、中心人物を決めてその大きさを基準にして他の絵人形の大きさを決めること。絵人形の動かしたいところや変化させたいところにはどのような仕掛けを使うのか。背景は、木を数本示すことで森が表せたり、魚を貼るだけで海の中に見せたりする表現法を例示した。これらについて、モーリシャスのワークショップの反省から、1枚で提示していた紙を3つに分けて、丁寧に説明した（図1）。以下、終了時間まで作品の制作にあて、作業の残りは翌日のワークショップに仕上げてきて参加することとした。

### (3) ワークショップの活動記録：2日目（2014年7月8日）

ほとんどのグループが作品はできており、演示の練習からのスタートになる。練習の前にデモンストレーションを見せる。

① デモンストレーション（10:00～10:15）：プログラム「1. はらべこあおむし（お話）」→「2. 大きな大根（お話）」→「3. 漢字の成り立ち（言語教育）」。

今回は学習者とのやり取りをしながら進めていくパネルシアターの特長（田中 2008）に着目させるため、「お話」ではあるが視聴者に声がけをしながら進めていくことを重視した。また、最後の「漢字の成り立ち」は、実際に日本の小学1年生の9月頃の教材であることを説明し、学校の授業として見てもらうよう示した。

② 演示の説明と「ワークシート3」の記入（10:15～10:30）：演示のポイントとして以下のことを説明した。

「演じる上で（How to play）－絵（人形）にかぶさらない（Don't cover picture）／メリハリよく明快に（Cheerful and Clear）／タイミングをはずさない（Good timing to play）」。

③ グループごとの演示練習（10:30～11:30）：会場で、コーナーごとにパネル板を用意して練習スペースを作った。演じるというより打合せをしている様子が見られ、演示を何度も繰り返し練習するようすはみられなかった。（この後、TEA Break: 11:30～11:45）

④ グループ発表と討議（11:45～12:30）：各グループのコメントについては図2のように指導した。（図2）

⑤ ワークシート記入と回収・片づけ。修了式準備（12:30～12:45）：演示後の感想をワークシートに記入してもらい、アシスタント（大学生）が回収した。時間を設けたことと、修了証（＝評価）につながることを期待してか、熱心に記入する様子が見られた。（この後、⑥修了式12:45～13:30）

### (4) 2014 ワークショップ（カルナール）の成果と課題の確認

以下、7点に分けてその成果と課題を整理していく。

① 成果：“授業を想定した気づき”の必要性

今回の参加者自身が日常的に行っている教育方法（教員が教え込む、教科書と黒板のみ）と異なる手法ながら、子どもを楽しませる・対話しながら進める参加型の教育方法の効果を実感し、日常にも行ってみたいという感想や欲求が高まっているようすがみられた。ただし、児童生徒と教員との双方向的な教育方法を示したかったが、デモンストレーションでは教員自身が参加者であり児童生徒役だったの

[グループ 1] ヤギが橋の上で譲らないので二人とも落ちてしまう教訓話。	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・川を描いているが途中アウトラインを描いていることで流れが止まる。イメージを広げなければ色をグラデーション的に塗りアウトラインを目立たせないことでつながっているように感じさせられる。</li> <li>・裏返し手法で動きを出したのはよい。</li> </ul>
[グループ 2] ポエム	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽を使ったことは、イメージしやく、よいねらいである。</li> <li>・一度に絵を貼ってしまうよりは、個々に貼るタイミングを考えるべき。</li> <li>・魚の動かし方がよかった。</li> </ul>
[グループ 3] 友達（お話）	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・動きが、ただ貼るだけなので、貼るときに動きをつけた方がよい。</li> <li>・貼った後、演者は、横にはけないと絵人形にかぶさって見えにくくなる。</li> <li>・文字が必要かどうか考えるべき。絵のイメージを妨げているのではないか。</li> </ul>
[グループ 4] お話	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一つ一つのものを言いながら貼っていくことは、特に年少の児童生徒にとっては確認になる。</li> <li>・2 人が重なっていると画面が見えない。</li> </ul>
[グループ 5] きつねとぶどう（お話）	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キーボードでの効果音がとても効果的に入っており、いいアイデアである。</li> <li>・動かし方もとてもよい。</li> </ul>
[グループ 6] お話	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・その場面で、絵人形が必要ないならばいっそ取り除いてしまう方が、場面がわかりやすい。</li> <li>・何も言わずに絵を貼るのではなく、印象付ける貼り方を心がけたい。</li> </ul>

図 2 グループ発表と討議

で、得られたイメージも十分だったとはいえなかっただろう。代案として、実際に学校を借りてモデル授業を見せるといった、児童生徒を前にした双方向的な方法を客観的に見てもらうことがパネルシアターの効能をさらに理解しやすくしたかもしれない。

## ② 成果：パネルシアターの教材作成が持つ授業構想の誘発

学習活動への導入目的としてのワークショップだが、教材作成ということが教員の授業を構想するうえで新たな可能性を持ったようである。カラー印刷されたパネルシアター教材は、これまでの教員の経験則から使い方と結びつきやすくなるようであり、多様なアイデアを誘発していた。どう使うか迷うようすはみられず、概ね教材としての基本的な理解は得られたようであった。

## ③ 課題の確認：描画が不得意な者への対応

2つの新たな見解を得た。一つはスマートフォン(iPhone)で画像を引いて描く者である。たしかに、描画の技法に巧い下手や得手苦手を解消するだろうし、これからの社会ではこうした手法を認めることは必要となるだろう(著作権や肖像権の問題もあるが、国や社会によって線引きは異なる)。もう一つは、図工の教員を参加者に加えたことである。描画の部分では図工の教員に頼る面もあったが、安心して絵を描く作業に取り組める点では効果があったと考えられる。また、絵を任せると同時に、授業の組み立てや教材の作り方についても安心して話し合いを進めていた。

## ④ 課題の確認：教材・教具選択の目を養う必要

CDでBGMを流し一度も演示者として言葉を発することなく演示を終えたグループがみられた。音楽(BGMや効果音)を活用する際のパネルシアターの役割について特化して再考する必要がある。

## ⑤ 課題の確認：演じることが苦手な教員の取り組み

1日目の作業で何も取り組まない男性教員がおり、声をかけても「大丈夫」と返答するだけだった。このグループは役割分担をしていたようで、この男性は演示役だったらしく、2日目の発表では生き生きと演じた。趣旨としては演じることを想定しつつ教材作成することを重要と位置づけていたのだが、協同で活動に当たることについての文化的差異があったのかもしれない。また、そもそも本番での強さの発揮の仕方であるとか、練習や稽古についての文化的背景の違いもあり、この点は、一概に評価

は難しく、今後の課題の一つとしてなお残る。

## ⑥ 課題の確認：制作時間の確保

“課題を持ち帰る”文化がなく、ワークショップの時間内にやり終えようと躍起になりかなりの勢いで仕上げようとした。一方で学校現場においても制作に使う時間がないという現状もあるようであった。本来のパネルシアターの持つ手軽な教材作成という要件が、この国の教員にとってどのような意味を持つのか、検討の余地が出てきた。

## ⑦ 新たな課題

そもそもの、パネルシアターという教授法への理解と受容は、その国や社会の持つ学校文化・教師文化(ここではとりわけ、授業観や教師-生徒関係観)を根底から揺さぶりかねないようなものである。例えば、パネルシアターは演者と観客が言葉のやり取りで進めていく特徴があるが、実際にインドにはそのような教授法がないのか、例としての演示を見ると好感触を感じながらも、いざ実際に自分たちが発表で演示するとなると教員が一方的に進めてしまうところが散見された。このことは深いレベルでの難しさがあり、二日間のワークショップではクリアするのは難しい。その点で、発表(演示)だけのワークショップも構想する必要があるのかも知れない。このようななかで、インターナショナルスクールの教員は、生徒(役)とのやり取りを少しではあるが取り入れていたので、日常の教育の違いだけで、理解すれば可能なのかもしれない。

一方、インドという国・社会の視点から、比較研究的に整理しておく。まず、参加者には、グループワークという手法がなじまず、ワークショップの行程や活動はおろか、そもそもの意義についてまで影響がみられることとなった。また、国柄なのか自分への評価を気にする。演じた後にコメントしたが、そのコメントに高い関心を寄せていた。指導者に対して敬意をもってワークショップに臨んでおり、指導者が言うことには絶対的に従い、指導されたことを素直に聞き入れて行動していた。一方で、メインの指導者以外のスタッフからの助言や指導は受け入れにくい場面もあった。表現という意味では、演示の場面を1グループに1つずつ示したが、一度確認したら「大丈夫。完璧」と口々に語り、一切練習を行おうとしなかった。教員としてのプライドなのか、演じることが簡単に見えるのかその点は、不明であった。

教材教具の可能性については、何らかの手ごたえは感じたようで、ワークショップ後、Pペーパーの

購入について問い合わせが多くあった。実際に自分たちでもやろうという気持ちの表れと感じられた。実際に授業に使いたいという声が多くあり、主催者がPペーパーを輸入する手はずにまで至ったことから、とても成果のあるワークショップとなった。反響も大きく、次年度もワークショップを開催することが決まった。

総じて、授業づくりという点で、教員にはこれまでの経験で培ったものがある。それに対してこのパネルシアターという教材・教具をどのように取り入れていくのかというところに作成・演示活動の意味が生まれてくる。授業づくりのポイントを示したうえで、パネルシアターの効果やパネルシアター教材をそこに入れる意味を明確にしていくことが、教員にとって理解しやすいことであるとわかった。また、児童生徒たちが意欲をもって自分から調べたい、知りたい、やりたいという気持ちをもって授業の課題に取り組みさせるのにパネルシアターは効果的である。インドではパネルシアターのような手法は日常的な授業の教授法とは大きく異なるようである。しかし、そのようないわば“異文化”の教授法も、それが自分のクラスで行われた時のこどもたちの様子を教員たちは思い描きやすかったようである。日々児童生徒に教えているということは、やはり、その表面的な手法はどうあれ、児童生徒がどう理解してくれるのかはカギであり、そこに関心があれば、パネルシアターの理解や受けとめるための素地はあると言えるのではないだろうか。それには、パネルシアターのもつ説明力の大きさも一役買っている。これは、視覚によって、簡単な仕掛けで、よりわかりやすく表現できることである。日常的に教えることと向き合っている教員にとっては効能を推測しやすい点だと考えられた。(田中)

#### 4 事例研究2: インド共和国でのワークショップの実践記録(2015)

##### (1) カルナール、デリーでのワークショップ(2015)の概要

前年に続き2015年8月31日からワークショップを開いた。2015年は開催場所が二か所、一つは前回開催したカルナールでの第二回目を、もう一つは新たにデリーで第一回目を行った。主催は前回同様NIFAAが、共催としてIIPAが、そして新たにJapan foundation Delhiがスポンサーに加わった。

ワークショップの内容として昨年から修正した点

は作成手順である。前日に現地メンバーと打ち合わせ、昨年からの改善点を確認した。そして、グループではどうしても他人任せになる参加者も出てくる。パネルシアターは、作成してみないと習得できないことから、一人一つの絵人形は最低作成してもらうこと。その絵人形を活用するためのテーマや脚本を作り、必要ならば背景にする絵人形や足りない絵人形も作成してもらうことを定めた。

##### [1] カルナールのワークショップの概要

参加者は全て小学校教員で22名である。スラムの学校の先生2名(男性女性1名ずつ)が参加していた。

前回のカルナールでは、英語が理解できない教員や、学校長から強制的に参加させられ意欲の高くない教員が混じっていたことから、次の点を改善した。一点目は、4月に少人数でワークショップのリーダー育成のための講座を開いた。その一回目の参加者の中から中心になりそうな人物を6人抽出してパネルの効能を十分に理解しておいてもらう。それにより言語が十分通じない参加者にもリーダーから説明が加わることをねらった。二点目は参加費を徴収する講習会とした。NIFAAの予算的な面も否めないが、そのこととは別に参加者の質を絞る上では参加費を払ってでも習得したいと思う人に絞られたことで意欲にもつながり結果はよかった。なお、インドではワークショップに費用を払うことはほとんどないとのことであった。

テキストは昨年同様、『授業で使おう! パネルシアター』(2009)を参考に、① Panel Theatreの概略(歴史・用語説明など)、② How to make a doll、③ How to make the trick of Panel Theater、④ How to make a Panel Board、⑤ How to set the Panel Board、⑥ Teaching Panel Theater、⑦ Advantage of The Panel Theater、⑧ Weak points of Panel Theater、⑨ Advice for the Play、⑩ Potential of Panel Theater for Teachingで構成したものを使用した。昨年はパネルシアターをよく見てもらい、肌でパネルの良さを体感してもらおうと説明的な講義は簡略化したが、今回はテキストにそった説明を入れて短い時間ではあるが講義的に進めていくこととした。

##### [2] デリーでのワークショップの概要

デリーでのワークショップは、初めての参加者ばかりという点を念頭に、「とにかく楽しい」「自分の授業に取り入れたい」と思えるようなプログラムを目指した。また参加者はいわゆる“インテリ”な教員が多いとの事前情報から、理論的な講義も意識

し、カルナールと同じテキストを使い講義に活用した。また、デリーの会場は完全に暗室の状態にできることから、ブラックパネルも紹介してパネルシアターの幅を見せることとした。さらに、カルナールでのワークショップの反省点から、絵人形の大きさを下絵に示し、絵人形が小さくならないようにした。

## (2) ワークショップの活動記録：カルナール1日目 (2015年8月31日)

① 登録・事前ワークシート記入 (9:30～10:00)：参加者にこのワークショップへ参加の目的をきちんと意識して参加してもらいたいことと、参加者のバックグラウンドや意識を知っておく必要があると考え、次の3つの事前のワークシートの記入を求めた。「(ア) Do you think you need to improve the method of teaching in your charged class? What kind of things you want to improve? What kind of things you are finding difficult in teaching method?」「(イ) What kind of things you want to learn in this workshop?」「(ウ) Do you use any support educational materials with a school textbook?」

② オープニングセレモニー (10:00～10:15)

③ ワークショップ開始 (10:15～10:30)：当日の予定説明、ならびに、デモンストレーション。プログラム「1. ボッパー (歌)」「2. はらぺこあおむし (話)」「3. 漢字の成り立ち (国語・教材)」「4. 江戸のエコ (社会・教材)」。

“ワークショップに楽しく参加すること”“パネルシアターが楽しさを導きうる教材であること”を条件として優先し、インドの人々の歌やダンスを好むといわれる国民性を意識し、歌に合わせ体を動かす題材の『ボッパー』を最初にもってきた。展開と仕掛けは、次の通りである。「1人・2人・3人のボッパー～」と歌に合わせて人形が草むらから飛び出してくる。そうして10人のボッパーが出揃ったところで、「1人目のボッパーは何しているかな?」と問いかける。「ダンシング」と答えが返って来れば軽く体を動かす。「スイミング」なら泳いでいるマネをする。知っている歌の替え歌であったことと10種類の仕草を考えるのも楽しかったようだ。第二に『はらぺこあおむし』で、掛け合いながら進出した。パネルシアターは一方通行ではなく相方向授業だという点を意識してほしいとねらい二番目にした。三、四番目は、授業を意識して日本での活用方法の例として見せた。「漢字」は視覚的な面からできており、実際に動かすところで覚えやすいこと。

「江戸のエコ」はインドでもリサイクルが問題になっているというので、教員たちがテーマを決める上でヒントになればと思い見せることにした。どういう意図でこのパネルシアター教材を作ったかの説明も入れた。

④ 絵人形づくり (10:35～11:30)：テキストを参考にしつつ「パネルシアターとは」の説明をする。今回は一人一つ絵人形を作ることにした。これは参加者全員が一つ作業をすることと、パネルシアターを知る上で絵人形を作成しておくことは重要だと考えたからだ。一方、パネルシアターの仕掛けについては、数多く提示すると参加者は仕掛けの多様さに目がいってしまい制作上混乱をきたすと考えて、「動作づけ」(糸留め)にしばった。(この後、小休止 11:30～11:45)

⑤ 脚本づくりについての説明 (グループごと) (11:45～13:00)：内容は、テーマの設定、背景についての教示、脚本作りなど。

以下、「目的の設定」として、テーマの例に「Song」「Folk tale」「Use for subject」を示し、制作した絵人形をどのような目的の教材に活用するのか(どのような目的でパネルシアターを使い、自分の作った絵人形をどのように登場させる脚本を作っていくのか)について話し合った。その後「絵人形と背景の設定」として、使用目的と脚本からどのような絵人形が必要になるかを話し合った。以上の説明後、グループごとに作業に移った。

⑥ 片づけと翌日の連絡 (13:00～13:30)：翌日の活動について説明する。発表があることを伝えておく。

## (3) ワークショップの活動記録：カルナール2日目 (2015年9月1日)

会場ではすでに前日の作業の続きを行う者もいれば、ほとんどのグループが自宅で絵人形の作成と脚本づくりの作業をしてきており、それを確認した。その結果、概ね次の演示の練習に移れる状況であった。ここで、混乱を避けて絞っていた仕掛けについて、参加者から他の仕掛けも教えてほしい旨の要望が出たことから、デモンストレーションに含まれる多様な仕掛けについても急遽説明を加えた。今回のデモンストレーションでは、演示の参考としてクイズ形式の作品を例示し、掛け合いで授業を進める特長を説明した。また、仕掛けとしては単純であってもそれを自在に動かすことでさまざまに見せられ、こどもの想像力をかきたてられることを伝える。また難しいテーマでもパネルにすることでこどもに受



け入れやすくなった例として『折り鶴の旅』を選択した。またこの作品自体内容が感動的であることから、見る方としてどのように感じるかを体験することで自分の演示や脚本について考えることができると考えねらったこともある。

① デモンストレーション (9:45~10:00): プログラム「1. 誰の足あと (クイズ)」 「2. 何になるかな (クイズ)」 「3. 折り鶴の旅 (平和教育)」

② 演技方と当日の流れの説明後、作業の続き (グループごと) (10:00~11:30): 演じる際のポイントとして次の3点を説明した。「Don't cover picture (絵に被らない)」 「Cheerful and Clear (元氣よく明確に)」 「Good timing to play (演じる間を大切に)」 。コーナーごとにパネル板を用意し、練習スペースを確保したうえで、実際に絵人形を置いてリハーサルをした。ただし、すぐに「できる」と思ってしまうのか、練習をしたがらない傾向があり、こちらで声かけして練習を行うように促した。(この後、小休止 11:30~11:45)

③ 作業の続きと仕掛けについての説明 (11:45~12:30): 仕掛けの説明の要望があり、テキストを見ながらデモンストレーションで見たパネルを例に説明した。仕掛けにはかなり興味があるようでとても熱心にメモを取りながら聞いていた。

④ 発表 (グループごと) とコメント (12:30~12:55): 各グループの制作作品とコメント内容は以下の通り。グループ A (『thirsty crow』) 無言で花を置くのではなく、絵人形を話しながら置くことでこどもには確認につながる。貼る位置は計画的に事前に考えて練習すべき、グループ B (ミュージカルにした物語) は立ち位置 (板を隠さない) を指摘、グループ C (イソップ「アリとキリギリス」) は、絵人形をクリアーにしたい時はアウトラインをしっかりと黒油性マジックで書くこと。反対に背景に溶け込ませたいならアウトラインは要らないことを指摘。また、ダンスなどのアクティビティにつなげるなら、パネルシアターでイメージをもたせてから次の活動に移ったほうがよい。同時に行うとこどもはどちらをみてよいかわからず、何方付かずになりパネルシアターを使う目的がぼやけることを伝えた。グループ D (『シンデレラ』) は、動かしたくて糸止めをたくさん作っていたが効果のほどは定かではない。この点については、実際に動かしてみても必要ないと感じたら貼り付けて、動かないようにしたほうが結果的には扱いやすいことを説明した。グループ E (道徳的な物語) は、インタラクティブな演示が

とても上手く、児童生徒との掛け合いはパネルの重要な特徴であるとして強調した説明をした。

⑤ 事後ワークシート記入 (12:55~13:00): ワークショップで得られたことの確認と活用してもらうため以下のような内容にした。「1. In what kind of things you find interest in panel theater?」「2. What do you think about the method of proceeding class while teacher and students can communicate freely to each other?」「3. Do you think you can use the Panel Theater's techniques, which you have acquired in this workshop in your class? - YES: In what way you will use?, NO: Why you can't use it?」

⑥ クロージングセレモニー (13:00~13:30)

(4) ワークショップの活動記録: デリリー 1 日目 (2015 年 9 月 3 日) \* 担当者と事前打ち合わせ済み

参加者は 25 名。グループは 5 グループとなった。

① 登録・事前ワークシートの記入 (9:45~10:00): カルナールと同じ主旨で事前のワークシートを作成し書いてもらった。このことで目的意識をもってワークショップに臨むことができたようであった。内容は以下の通り。「1. Do you think you need to improve the method of teaching in your charged class? What kind of things you want to improve? What kind of things you are finding difficult in teaching method?」「2. What kind of things you want to learn in this workshop?」「3. Do you use any support educational materials with a school textbook?」

② オープニングセレモニー (10:00~10:20)

③ ワークショップ (10:20~10:40): デモンストレーション、プログラム「1. ポッパー (歌)」 「2. はらべこあおむし (話)」 「3. いいものなあに (ゲーム)」 「4. ねずみの嫁入り (話)」

今日の予定を説明後、デモンストレーションの例示。初めてパネルシアターを見る参加者ばかりなので、「パネルシアター」が楽しい教材であり活用の可能性を感じられるようにと考えて題材を選定した。参加者はいわゆる“頭でっかち”な教員が多いとの事前情報から、しっかりと見るポイントや制作ポイントなどを述べるようにした。カルナールと同じく歌やダンス好きの国民性を意識し、歌に合わせ体を動かす題材の『ポッパー』を最初にもってきた。この題材は子どもたちとのやり取りで内容が変化することも付け加え、子どもと一緒に楽しめることも話した。二番目の『はらべこあおむし』では、

聞いている人と掛け合いしながら進めていくことを重視し、パネルシアターは一方通行ではなく双方向授業だという点をねらった。三番目のゲームは、歌がありクイズになっているものでパネルが簡単で作りやすいイメージをもたせ、制作に臆することなく入れるように考えた。四番目はインドにも似たような話があると聞き及び日本の昔話を取り入れた。デリーは初めての開催なのでとにかくパネルを作ろうという気持ちになりそうなもの、制作のヒントになりそうなものを意識した。パネルシアターを制作するのが初めての参加者なので、主催者側がボランティアスタッフを用意してくれた（一日目・2名。二日目3名。2名はデリー在住の日本人2名。二日目はこの2人に日本語を勉強したインド人1名が加わる）。そのスタッフに支援上のポイントを示し、活動中に指示して回った。例えば、絵の具の塗り方になれていないインド人への絵の具の水加減や絵の具のパレットに出す加減、裁縫をあまりしない（サーバントにしてもらう）ため、玉留めの仕方を教えることを指示した。

④ 絵人形づくり（10:40～11:30）：テキストを参考にしながら「パネルシアターとは」の説明をする。カルナールと同じく1人1つ絵人形を作ることにした。初めてなので絵が小さくなりがちなので丸で顔・胴・足・手などを描いたものを示し、下絵を作るときに下に敷いて絵を描けるようにした。絵人形の作り方については、使う仕掛けとして「動作づけ」（糸止めで動きをだす）に絞って説明した。（終了後 tea break 11:30～11:45）

⑤ グループごとに脚本づくりについて説明をする（テーマ・背景・脚本作りなど）。（11:45～13:00）：(a) 目的（テーマ）の設定。制作した絵人形をどのような目的（「Song」「Folk tale」「Use for subject」）の教材に活用するのかについて話し合う。決定後、脚本作りと背景やその他の絵人形の作製。

パネルシアターの場合、数本の木だけで森を表したり、魚だけで海の中を表せて、児童生徒たちにイメージさせる特長があることを実際にパネル板に絵人形を置きながら説明。そのことによって絵人形を数多く作る必要がないことを伝える。

⑥ 片づけと翌日の連絡（13:00～13:30）：翌日の流れについても説明し、発表も行うことを伝える。

## (5) ワークショップ活動記録：デリー2日目 (2015年9月4日)

1日目に引き続いての作業だが、全グループが自宅で作業をしてきていたため、絵人形と脚本はほぼ完成していた。そこで、実際に作った絵人形の配置や脚本に合わせた演じ方の練習からのスタートとなった。ただし、当日が年に一度の「先生の日」にあたり参加者が減り、グループによっては、考えていた演示ができず他のグループに参加するという事態もあり、結果4グループになってしまった。

デモンストレーションとしては、1日目は“楽しいもの”を意識したが、2日目は実際の授業での活用を意識し教科指導のヒントになるものを紹介し、どのような効果があるのかも説明した。その後ブラックパネルも例示し、パネルシアターの可能性を示した。また、デモンストレーション後にテキストに基づき、実際のパネルを提示しながら仕掛けの効果についても説明を付け加えた。

① デモンストレーション（9:50～10:20）：プログラム「1. 誰の足跡（クイズ）」「2. 漢字の成り立ち（国語・教材）」「3. 折り鶴の旅（平和教育）」「4. 【Black panel】花さき山（道徳・教材）」

② 演じ方と2日目の流れの説明後、グループごとに作業の続き（10:20～11:30）：演示のポイントとして以下の3点を説明「Don't cover picture」「Cheerful and Clear」「Good timing to play」。コーナーごとにパネル板を用意して練習スペースを設けた。練習の状況は熱心さや繰り返すようすもみられないことから、演示発表後に評価することを伝えた。このことにより、練習を見てほしいという声や繰り返し練習する光景がみられた。（その後 tea break 11:30～11:45）

③ グループごとの発表とコメント（11:45～12:30）：制作作品とコメント内容は以下の通り。グループA（制作作品は、お話「マンゴの話」）は語りの上手さが際立った。ただしグループ全体的に上手なことから民族性も考えられる。パネルシアターを見て歌のイメージをもたせてから歌を覚える活動に入ったことが、児童生徒に取り組みやすいと思われる点。グループB（お話と歌のコラボレーション）は、子どもたちへの投げかけをいれながら展開していたこと。グループC（制作作品は、ゲーム）は、導入にゲームをいれた後にパネルシアターをしたこと。導入で引きつけてから活動に持っていく構成の効果の高さを褒めた。グループD（歌とお話のコラボレーション）は、音楽を取り入れて学習

につなげた点を取りあげて講評した。

④ 事後ワークシート記入・グループディスカッション (12:30~12:50): パネルシアターのプラス面・マイナス面について。

⑤ グループディスカッションの発表 (12:50~13:00): パネルシアターにおける、教員と児童生徒のやり取りで進めていくことの効果や視覚的な効果についてプラス面がたくさん出された。

⑥ クロージングセレモニー (13:00~13:30)  
(6) 2015 ワークショップ (カルナール、デリー)  
の成果と課題の確認

① 成果: 授業を想定した気づきの発見

このパネルシアターのためのワークショップは、授業のための教材作成とそれを使つての実演までを、一連の流れとして作業するところに意義があると考えてきた。そこで、2013 年ワークショップ (矢野・田中、2013) をさらに模索的に修正・発展を施したのは次の点である。パネルシアターとして適切な絵人形の大きさを理解するための仕掛けとして、下絵を利用した絵人形作りを施した。あらかじめおどろばな人型を提示し、それを下に敷いて絵人形を作るように教えたことで、絵人形の大きさが適度な大きさで作られた。次に、テキストの準備。さらにこのテキストだけでは文字だけでわかりにくいと考え、テキストの部分や頁のパネルを使って、実際に動かしながら説明したのが理解しやすかったようだ。

また、パネルシアターの本質に迫る点としては、表現したい事物を絞り込んで数少ない絵人形で表現することが醍醐味であると考えるが、その数の少なさの効果や利点は、実際にパネル板に絵人形を貼りながらの説明が効果的であると実感した。

② 成果: 異なる文化・社会的背景での指導法として

参加者については、事前にコーディネーターによるすを尋ね、教員の素地も影響することから、素地を考えた提示や説明が準備した。デリーの教員は質が高いと聞いていたが、たしかに理解力はカルナールよりも高かった。デリーでは時間通り進行できたため、グループディスカッションを個人のアンケートの後に入れた。まずは自分で今回のワークショップを振り返り、パネルの長所、短所、授業への取入れなどを考え、文字化する。そして、グループで話し合う。他者の考えを共有する中で自分の考えをよりよいものにするためである。その点、参加者に受け入れられ、「よかった」とのアンケート結果も得

られた。皆で話し合う・協力するというのが不得手であると聞いていたが、リーダーを決めるよう進行手続きを説明した結果、うまくやれた。教員としての教材作成や教授法に関するディスカッションや共同制作は、ある程度素地も影響するであろうが、手法として不可能ではなく、かえって社会・文化的背景を越えて通じるものがあるのではないだろうか。

今回のインド特有であろうと考えられたのは、ホームワークで制作を完成させて来る参加者がほとんどだったことである。2014 年の際にホームワークは期待できないと事前に言われていたが今回やってきたことに驚かされた。それは次の日の見通しを参加者に持たせたことが伝わったからであろう。次に、裁縫や絵を描くという点は、インドの教員文化にはないところである。そのような所用はサーバントにやらせたり、店でやるなどの背景があるためである。その点、日本のようにどの教員にも当然のように要求できないと考えたが、実際にはワークのなかで助け合っていたことに驚かされた。最後に、制作行程で「楽しい」とつぶやく参加者が多く、児童生徒とやり取りをしながら進めていく教授法への興味ももっていた。この点、パネルシアターのワークショップとしては成功である。

③ 課題の確認: 描画が不得意な者への対応

今回も図画工作担当の教員の参加はあったが、他の教員のほうが多かった。ただし、自分がどのような教授法を学びに来ているのかをよく理解しており、何もしないということはなかった。また、上記のように、下絵を示すことが絵を描きやすくしたようだ。

④ 課題の確認: 演じることが苦手な教員の取り組み

今回はワークショップの趣旨もある程度理解していた参加者だったことから、表現が好きな教員が集まっているようであり、スムーズであった。また、教職 1 年目の教員も多くいたが、上手くやっていた。

⑤ 課題の確認: 制作時間の確保

今回、「作ることが楽しい」と tea break も休憩をせずに作業を続ける参加者が何人もいた。目的意識を持った参加が功を奏したと考えられる。さらに、翌日のワークショップの内容を十分に伝えることで、時間を考えて手分けして作業し、持ち帰って作業してきた。その意欲に驚くと同時に、趣旨の理解の重要性を再確認した。今後、カルナールでは 9 月末にコンベンションを開くと発言したり、双方でグ

ループを作って橋座づくりをしていきたいと話が出ていた。このようなところに意欲へのつながりが表れていた。

#### ⑦ 新たな課題：アンケートの分析から

受講者には、ワークショップを通じての、事前事後等のふりかえり兼アンケートを記入させている(2014 年までは英語で、2015 年はヒンディー語もかまわないこととし回収後に英訳してもらった)。そこからみえてきたことを以下に整理する。

まず、インドの学校世界での日常的な教材教具はまだまだ乏しいことが確認されたが、それと同時に、教員は児童生徒にいかにわかりやすく集中させて教えるかについても課題として考えていることもみえてきた。それは、受講教員が、ワークショップに漠然と参加したわけではなく、自身の日常の教授方法の変化を求めており、そのためのヒントを期待して参加した教員が多かったことから類推できる。結果的に受講者は、日常の教授行為の経験から、どの教科にもパネルシアターという手法が使える、あるいは、使ってみたいという授業イメージをもつことができていた。また、本質的なパネルシアターへの理解として、パネルシアターを使うことで自由に児童生徒とやり取りができることをよいことだと捉えている回答が散見された。これは、パネルシアターがインタラクティブな教材であることを幾分かは看破したことを物語っている。また、パネルシアターの利便性としての手軽さについては、クラスに取り入れる上で、「わかりやすい」「提示が便利である」「忘れにくい」をあげているものが多かった。(田中)

## 5 パネルシアターの実践指導への提起

今回のワークショップの試行から、第一に、授業づくりのポイントを示したうえで、パネルシアターの効果やパネルシアター教材をそこに入れる意味を具体的、实际的に示して見せることが、文化等の背景の異なる教員にとっては理解しやすくなることがわかった。授業づくりという点では、どの教員にもそれまでの経験で培ったものがある。そこにこのパネルシアターという教材・教具をどのように取り入れていくのかというところに意味が生まれてくる。田中(2008)は、「パネルシアターは、子どもたちをその世界に没入させ、あたかもその世界に身を置いているかのように、教員が提示した課題に取り組む効果が見られる」とその特徴を示している。イン

ドでは、そのような教授法は“教える”という概念の中にはない文化であることから、新しい教授法の文化として臨み、試した上で、自らの授業に取り入れたいと感じたようだ。それは、参加者が実際の学校教員だからこそ、その教材が自分のクラスで用いられた時の児童生徒たちの様子が容易に推測できたためであろう。ただし、このことから、実際の児童生徒のパネルシアターでの学びのようすや反応を見れば、研修の展開や理解の程度はさらにちがったのではないかと予想される。この点について、実際、カルナールでは、ワークショップ終了の翌日、参加者うちの2名が属する学校を訪ね、パネルシアターを使って日本文化を教える授業を行った。プログラムは「1 ボッパー」「2 誰の足跡」「3 はらべこあおむし」「4 漢字の成り立ち」「5 折り鶴の旅」であった。ここでは生徒たちの反応のよさに学校教員たちも大いに満足しているようすだった。さらには、自分たちも授業に取り入れたいという気持ちも高まったようだった。

第二に、パネルシアターは、事物についての説明能力が高い点に特長がある。これは、視覚によることであり、さらには、簡単な仕掛けにより、より分かり易く表現できるところにある。この点も、日常的に“教える”ことと向き合っている教員にとっては効果がわかりやすく向き合いやすい部分だと感じられた。

このように、パネルシアターを教員に伝えるには、授業づくりの行程と特性をきちんと整理し、その要件として、パネルシアターの効果や特長を知らせること。そして、参加者自身が自分の授業に取り入れたときの様子が想像できるような指導の手順を含めて構成することが肝要であるといえるだろう。(田中・矢野)

## 6 まとめ

本論は、前回のモーリシャスでのワークショップに続き、インドでも2カ所(カルナール、デリー)の異なる土地で実験的に行ったワークショップの報告兼記録であり、実践を分析したものである。そもそも、この一連の研究は、モーリシャス研究でもなければ、インド研究でもなく、エリア・スタディではない。あくまでも、日本で生まれた特長ある教授法を、いかに本質的に理解できるのかをねらいながら、コンパクトに理解・演習といった実践指導の啓蒙が可能であるかと地域性のちがいに留まらず積み

重ねている。その意味では、比較研究の様相を採りながら、そこから見えてくる一般性への示唆が重要となる。すなわち、社会的背景や教育観の異なる教員への研修を通じて、パネルシアターを教える上での一般的要件や特性を事例研究的に積み重ねている。今回のインドでは、教材・教具の実際の活用場面をいかに実感をふまえて理解していくかということと、そのための前提としての児童生徒の反応をいかに思い描きやすいかを要件ととらえた。前回の、作成行程と活用場面の表現としての演示を同時に行うことの効果という研修の要件とともに、今後さらに、多様で異質な受講者へのパネルシアターの指導の手法・カリキュラムの枠組みとして、探索的に積

み重ねていくことが必要であるし意義を持つだろう。(矢野)

#### 参考文献

- 矢野博之・田中正代 「パネルシアターの実践指導法  
研究 (1) ―モーリシャスでの指導ワークショップ  
を事例として―」 大妻女子大学家政学部紀要  
第 50 号 2013
- 田中正代 「パネルシアターの教材としての可能性―  
子どもの理解様式に視点をあてて―」 大妻女子  
大学家政学研究科修士論文 2008
- 授業パネルシアター研究会『授業で使おう！パネルシ  
アター (低学年編)』アイ企画 2009

#### Summery

“Panel-Theater” was developed by Mr. KOUDA Ryoujun in 1973, and has used in various educational scene as teaching material in kindergarten, in subject teaching of elementary school and special needs education. By contrast its methodology and curriculum of method of teaching has been in developing. A series of these research and report is aimed at finds of important matter for making and training Panel Theater. Following last research in Mauritius 2013, we designed and tried holding Workshop for school teachers on Karnal and Delhi in India, 2014 and 2015. The point is that it is important to take feelings and a concrete draw in the process of workshop like this. Even in teachers from different background, it depends on pass the process of making/training Panel Theater with realistic feelings of real teaching.